

# 東映動画『白蛇伝』のヴェネツィア国際映画祭への出品に関する調査

Investigation Report on the Presentation of “HAKUJADEN” at the Venice International Film Festival

臼井 直也 USUI Naoya

デジタルハリウッド大学 准教授  
Digital Hollywood University, Associate Professor

本報告は、東映動画（現東映アニメーション）製作で国内初の長編カラーアニメーション作品である『白蛇伝』（1958）のヴェネツィア国際映画祭への出品および現地での評価に関する調査をまとめたものである。日本のアニメーションは1950年代前半から本格的に海外映画祭への出品を行っていたが、これまでの海外発信史研究は国内の二次史料を用いたものが中心であった。これは本報告で扱う『白蛇伝』も同様であり、東映動画所有の資料を用いた言説が引用され、一次史料の不在が課題であった。そこで本報告では、ヴェネツィアにある「ピエンナーレ財団現代美術史アーカイブ（ASAC）」および「ピエンナーレ図書館」の一次史料の収集および分析を行った。また、限定的ではあるが当時の映画雑誌の分析も行った。本調査の結果、『白蛇伝』は映画祭で受賞したもののその現地での報道はごくわずかであり、映画祭で与えた影響は極めて限定的であったことが示唆された。

## 1. はじめに

### 1.1 東映動画『白蛇伝』の海外発信

『白蛇伝』（1958）は、東映動画（現東映アニメーション）が制作した日本初の長編カラーアニメーションである。「東洋のディズニー」を目指して制作した作品であり、原画1万6474枚、動画6万5213枚、約7カ月の作画期間と4047万1000円の製作費をかけた作品である<sup>[1]</sup>。

本作品は国内上映だけでなく海外配給された最初期のアニメーション作品でもある。東映アニメーションの資料によると、「ベネチア国際児童映画祭児童部門特別賞、ベルリン市民文化賞、メキシコ政府名誉賞などを受賞するなど海外でも高い評価を得て、香港、台湾やアメリカ、ブラジルなどで公開され、総額9万5000ドルの配給収入を獲得。日本のアニメーションが海外マーケットでも魅力をもつ作品であることを証明し、市場開拓の役割も果たした」<sup>[2]</sup>と報告されている。海外配給が収益の確保を目的としたものであったとすれば、海外映画祭への出品は「作品の海外市場への周知」または「受賞により作品に箔をつける」という目的があると考えられる。その点において海外での受賞で最も影響力を持つものの一つが「ヴェネツィア国際映画祭」への出品である。

ヴェネツィア国際映画祭はカンヌ、ベルリンと並ぶ世界三大映画祭の一つである。前段で「ベネチア国際児童映画祭」という名前を引用したが、これは各国の長編劇映画がグランプリを競うことで知られるヴェネツィア国際映画祭の一部門と位置づけられる。東映動画側の記録によると、『白蛇伝』は1959年の映画祭に出品され、「特別賞」を受賞したと記録されている<sup>[3]</sup>。

### 1.2 先行研究

1950年代の日本のアニメーション作品の海外映画祭での上映に関しては、大藤信郎という個人作家を対象とした調査研究がある<sup>[4]</sup>。この調査では、大藤作品が上映されたイギリス、ドイツ、フランス、イタリア、オーストラリアの映画祭に関する現地調査が行われている。しかしながら、これまでの研究は個人作家の作品を対象としたものが中心であり、商業作品であり制作規模の大きい長編アニメーションを対象とした研究は行われていない。現在海外で人気を博している日本のアニメーションは商業作品が主流であることを考えると、『白蛇伝』が海外映画祭でどのような評価を得たのかを明らかにすることは、日本のアニメーションの海外発信史を理解する上で極めて重要であると考えられる。

### 1.3 本研究の目的

本研究の目的は、『白蛇伝』のヴェネツィア国際映画祭での上映に関する現地史料を収集し、出品までの経緯や受賞記録、作品の評価など、これまで国内史料によってしか行われなかった言説を再検証することである。

## 2. 調査概要

調査は、ヴェネツィアにある「ピエンナーレ図書館」「ピエンナーレ財団現代美術史アーカイブ（ASAC）」そして「トリノ国立映画博物館」で行った。調査対象は現地に所蔵されている一次史料である。ピエンナーレ図書館では当時の映画祭の公式資料が保管されており、『白蛇伝』が上映された「第11回国際児童映画祭」の各種資料を分析した。ASACには映画祭事務局と各国映画会社等との間で交わされた書簡、映画祭について報じた各国の新聞記事、雑誌記事が保管されている。本研究ではこの書簡と記事を分析対象とした。また、上記以外にトリノ国立映画博物館に所蔵されている映画雑誌『Filmcritica』の1959年に出版された号の分析を行った。

## 3. 調査結果

### 3.1 映画祭公式資料の分析

まず映画祭自体の基本情報を確認したい。金獅子賞を争う長編劇映画の部門は1959年8月23日から9月6日の開催期間であるが、「国際児童映画祭」は7月2日から12日の開催期間であった。映画祭の公式資料によると「国際児童映画祭」は「7歳以下」「8-12歳」「13-18歳」の3部門に分かれており、1959年は日本から『白蛇伝』（8-12歳）に加え、桜映画社の『海ッ子山ッ子』（13-18歳）が出品されたことが確認できた。参加国は当初12カ国を予定していたが、インドの出品作品の輸送が間に合わず、11カ国（チェコスロバキア、フランス、日本、イギリス、イタリア、ユーゴスラビア、メキシコ、ポーランド、スペイン、ソビエト連邦、アメリカ）の参加と、エントリー作品は計41作品であった。ほかに公式資料としては作品のシノプシスがまとめられた資料が保管されていた。

### 3.2 ASAC所蔵の書簡および新聞記事と雑誌記事の分析

映画祭側と『白蛇伝』に関する日本側との書簡は以下12点がASACに保管されていた。

1. 映画祭ディレクター F.L.Ammannati から在イタリア日本国大使館宛の書簡 (1959年1月26日付)
2. F.L.Ammannati から東映動画宛の書簡 (1959年1月26日付)
3. 東映動画から F.L.Ammannati 宛の書簡 (1959年3月17日)
4. 「社団法人日本映画製作者連盟」事務局長池田義信から F.L.Ammannati 宛の書簡 (1959年4月20日付)
5. F.L.Ammannati から日本大使館宛の書簡 (1959年4月25日付)
6. 日本大使館から F.L.Ammannati 宛の書簡 (1959年5月12日付)
7. 日本大使館から F.L.Ammannati 宛の書簡 (1959年5月18日付)
8. F.L.Ammannati から「社団法人日本映画製作者連盟」事務局長池田義信宛の書簡 (1959年5月27日付)
9. 「社団法人日本映画製作者連盟」事務局長池田義信から F.L.Ammannati 宛の書簡 (1959年6月9日付)
10. F.L.Ammannati から「社団法人日本映画製作者連盟」事務局長池田義信宛の書簡 (1959年6月16日付)
11. 日本大使館から F.L.Ammannati 宛の書簡 (1959年7月25日付)
12. F.L.Ammannati から日本大使館宛の書簡 (1959年7月28日付)

この中で注目したいのは出品までの経緯である。1958年10月に日本で上映された『白蛇伝』だが、1959年1月26日付で在イタリア日本国大使館および東映動画に映画祭側から書簡が送られている(上記1および2)。大使館宛の書簡には「日本の『白蛇伝』についてのとても好意的な知らせを聞きました。ヴェネツィア国際児童映画祭へ招待したく存じます」とあり、東映動画には「『白蛇伝』の素晴らしいレビューを読み、是非ヴェネツィア国際児童映画祭のプログラムに入れたいと思っております」とある。東映動画宛の書簡には宛名が記されていないことから、この書簡が東映動画へ宛てた初めての書簡であると考えられる。以上の情報を統合すると、『白蛇伝』の出品については東映動画側からのエントリーがあったのではなく、日本大使館からの推薦を得た映画祭側が『白蛇伝』を招待した可能性が高い。この書簡以降、映画祭側は東映動画と直接映画祭の資料送付に関するやり取りを交わす一方、日本側のエントリー作品のとりまとめを行っていた「日本映画製作者連盟」の事務局長池田義信などとやり取りを行っていたことが分かる。

次に、新聞記事、雑誌記事の分析結果だが、ASACに所蔵されていた1959年のヴェネツィア国際映画祭の記事は計401あり、発行地域の内訳はイタリア222、アメリカ56、フランス31、スイス24、ドイツ(東西)16、ベルギー11、イギリス10、ポルトガル7、オランダ6、スペイン5、オーストリア3、セルビア2、ユーゴスラビア1、インド1、ルクセンブルク1、ポーランド1、不明4である。401の記事の中で、『白蛇伝』について触れているものは5点であった。

まず確認したいのは受賞結果について記された映画雑誌『INTERMEZZO』である。1959年7月31日に発行された号において、各受賞作品が記載されており、「Diploma speciale」(特別賞)に『白蛇伝』の名前が確認できた。同様の受賞結果は、雑誌『FERRANIA』の1959年9月号、『NUOVO NOTIZIARIO』の1959年8月号でも確認された。

次に、『白蛇伝』への評価を確認したい。前述の『INTERMEZZO』では「古代中国のおとぎ話を題材にしており、豊かなほどに幻想的な雰囲気の中で若者の心で最も高貴で誠実な愛を説明するのに適したきっかけを与えてくれる」という短評の他に、同号で以下のように評している。

東洋の魅力的な物語である数下泰司の長編アニメーション『白蛇伝』は優美で詩想があり、ディズニーのような他の映画会社の同ジャンルの作品より優れたものだと思われる

脚本・演出担当である数下泰司の名前とともに、作品としての評価は極めて高いことが分かる。また、全く同じ内容が新聞『L'ECO DELLA STAMPA』1959年8月5日付の記事にも引用されている。

2つ目の記事は前述の『NUOVO NOTIZIARIO』1959年8月号の特集で、「驚くべきは古代中国の伝説を題材にした日本の数下泰司監督の長編アニメーション映画『白蛇伝』である」という短評とともに作品のあらすじを紹介している。

3つ目の記事は、イタリア国内の新聞『IL GAZZETTINO』1959年11月24日付の記事である。記事の見出しは「シネマフォーラム賞、『ビルマの豎琴』に授与一辻茂氏深い感謝—カラー長編『白蛇伝』上映」であり、以下のように評している。

イベントの最後には第11回国際児童映画祭にて受賞したカラー長編アニメーション『白蛇伝』が上映された。この作品は東洋の人々の詩情を完璧に映し出した繊細な話で愛の勝利を表現したものである

11月という時期からも分かるように、この記事は映画祭自体の記事ではなく、その後行われたイベントでの上映に関するものである。この記事においても『白蛇伝』は高く評価されていることが分かる。

### 3.3 映画雑誌の分析

『Filmcritica』の1959年に出版された全8号(No.83-91)を確認した。日本映画についての記述は例えば1959年5月の88号に黒澤明が紹介されるなど僅かにあるが、日本のアニメーションや『白蛇伝』についての記述は見られなかった。

## 4. 考察

以上の限定的な史料であるが、『白蛇伝』のヴェネツィア国際児童映画祭での上映および作品評価について考察を行う。まず、『白蛇伝』が出品された「国際児童映画祭」は、ヴェネツィア国際映画祭の一部門ではあるものの、その位置づけはグランプリである「金獅子賞」を争う長編部門の扱いとは全く異なる。前述のように参加国が11カ国と長編部門と比較して多くない。ASACに保管されていた新聞記事、雑誌記事も大部分が長編劇映画に関する記述であり、メディアでの扱われ方も注目されているとは言い難いであろう。メディアで多く報じられた長編部門とは開催時期が異なることから紙幅を奪い合ったということではなく、また特別賞を受賞した作品であるにもかかわらず2つの記事でしか紹介されていないことから、「国際児童映画祭」への世間の注目がいかに小さかったかということを読み取ることができる。

また、両記事ともイタリア国内の記事であったことにも注目したい。イタリア以外の地域では『白蛇伝』は報じられていないことから、『白蛇伝』の情報は開催国であるイタリアでの受容にとどまったのではないだろうか。このように考えると、『白蛇伝』のヴェネツィア国際児童映画祭での受賞の影響は限定的であったと推察される。

## 5. おわりに

本稿では、『白蛇伝』のヴェネツィア国際児童映画祭への出品に関する調査報告を行った。今後の課題としては本映画祭への出品と海外配給の関係性の分析である。映画祭は一般的に作品の見本市という性質を持ち、映画関係者が作品を吟味し自国での配給権を交渉する場でもある。東映動画の当時の報告では『白蛇伝』は「ドイツ語地域・中南米地域・東南アジア全域に輸出供給されるようになった」<sup>[5]</sup>とあるが、この輸出に映画祭での上映と受賞がどの程度影響を与えたかは不明である。特にこれらの多くは在留邦人が多かった地域でもあるため、「現地の人たちを対象とした上映」なのか、「在留邦人を対象とした上映」なのかによってその位置づけは大きく異なる。

また、『白蛇伝』以降、東映動画は長編作品を映画祭に発信、また輸出し続けている。長編2作目である『少年猿飛佐助』(1959)や『西遊記』(1960)がヴェネツィア国際映画祭でどのような評価を得たのか、またどのように輸出されていたのかの調査も今後の課題である。

#### 参考文献

- [1] 50周年実行委員会, 50周年事務局50年史編纂チーム編纂: 『東映アニメーション50年史: 1956-2006: 走り出す夢の先に』東映アニメーション(2006年), 23-24頁.
- [2] 東映ビデオ株式会社: "白蛇伝"  
<https://www.toei-video.co.jp/special/hakujaden/>(参照2024年8月31日).
- [3] 東映十年史編纂委員会編: 『東映十年史: 1951年-1961年』東映(1962年), 270頁.
- [4] 白井直也: 『大藤信郎アニメーションの海外映画祭への発信及び現地評価に関する調査研究—海外映画祭を中心としたネットワークが大藤作品の受容および評価に果たした役割に関する一考察—』公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団年報2014-2015別冊(2015年).
- [5] 東映十年史編纂委員会編: 『東映十年史: 1951年-1961年』東映(1962年), 250頁.